

先進繡像玉石雜誌

禮



先進繡像玉石雜誌卷第八目錄

足利治部大輔高氏出陣圖

同贈尤大長真容二種并傳

十五歳元服

鎌倉五小

表中出陣

藤源二流足利氏

八幡太郎旗二種

足利家庶流

旗竿

上箭奉納式

御諱字

御加賀局

相摸二郎時行

道服

生來社

持明院教

船中靈夢

從三位藤原清子

天龍寺上梁額

乘車式

尊氏卿自畫地藏

乾峯和尚

尊氏卿寶塔

尊氏卿詠歌

芝藥師圖羽

二条高倉御所

迎衛東洞院御所
 御書式
 日靜上人
 夕顔笠
 御膳式
 折敷
 大床子
 臺盤
 手飯匙
 そち
 籬
 揚枝
 御服式
 等持寺

先進備像玉石雜誌卷第八目錄終

九七目

足利治部大輔源高氏出陣圖 或家藏



摸本秋色
 鎧
 大楯舉銀磨
 切付ツラ
 ノクツ金
 野總
 馬栗毛

三圖共 信兆寫

同 贈左大臣真容

等持院安置



同上

山城國葛野郡嵯峨 天龍寺安置



等持院贈左大臣 尊氏家ハ足利讚岐守贈從三位貞氏卿
乃二男あり 貞氏卿乃長男ハ左馬助母ハ上杉修理亮頼
重の女なり嘉元三年鎌倉大倉乃館小誕生す 幼名ハ
又太郎元應元年十五歳乃とき先蹤了よりせ相摸守高時
乃館ふくく元服一思利又太郎高氏と名乗るく叙爵
て治部大輔了任せら敷 十五歳乃冠服ハ平城天皇を始
正天皇花山院ニおけ年を用ひて入人長の上ふくハ戸令
小元野子十又女年十三以上婚嫁を聴とあれハ元服
乃満り轉進治元年四月十八日の条ハ北條五郎時連
十五歳ふく頼朝卿の御所不於く冠服の式あり又思利
乃家不くハ貞氏卿乃曾祖父泰氏北條泰時の外孫と
泰の字を承續たりハ其子頼氏ハ頼朝將軍の一字を
賜り其曾孫貞氏ハ北條元弘元年九月五日貞氏卿乃
貞時乃一字を申せしハ 年五十九歳あり卒去法名ハ淨妙寺教貞ハ道觀と稱し

ハノ二

鎌倉大藏村乃東小稻荷山淨妙寺あり鎌倉五ハ乃弟
五なり 鎌倉五ハ至徳二年七月藤原院義満の時ハ
壽福寺弟三淨智寺弟四 開山ハ退耕行勇和尙とく千
淨妙寺弟五ハ也也 乃法嗣あり初ハ極樂寺と稱せし貞氏
光國師 乃法嗣あり初ハ極樂寺と稱せし貞氏
郷を葬り後今乃寺号不改めしと也
尊氏ハ時ハ六歳血氣漸さかんありと云と也新了嚴父
乃表ふ當王悲歎乃候いさく乾く以引籠りて在ける
主上 後醍醐 笠置ハ臨幸ありて畿内乃兵士ハ諭旨を成下
させしハ河内國ハ楠正成 大和國ハ吉野十津川乃
者ハ官軍ハ馳加事既ハ大變了及ハいふんとハ波羅の
早馬日々了頻波をゆく告あけけせハ高時ハ通大ハ教馬

一門他門乃大名を催促し上洛せしむる依
て尊氏郷中辭さるる禍なく九月廿七日鎌倉を打たる京
都へ進發せり是れ里尊氏郷中七日乃佛事終る後あり
事避る處ふしと云ハ魯公做會勢了るる上前々著されし
て其利了後人との亂知まると孔子夏子答玉へ里公羊傳
小臣大表あると云金革の事み君あまを使人ハ非ありと
思えく里勢等ハ君臣の同ふくた子斯の如しといハ高時
入道乃臣と云々高時高資を出を拒之終了承久の故事不従ふ
と云とハ長嘯高資を出を拒之終了承久の故事不従ふ
尊氏郷父のため了孝養を爾るに抗る小同廿八日笠置の
城陶山小見山々夜討み落たりしかば尊氏郷ハ直子河
内乃國へ發向ありけり十月下旬赤坂の城も落るれハ
すく鎌倉へ下向せり教正慶二年閏二月至上後醍醐天皇
岐國を御出ありく伯耆國船上へ遷幸するにけり此ハ官

軍に方ふ力を合せ六波羅へ攻上るす鎌倉へ向さる
ハ高時入道すく尊氏郷中上洛ありく衣越尾張高家
と共六波羅を助る合戦乃指揮を御籌あ終るしと僅
されけり折ふ一尊氏郷所勞とく引發里のりけりを定
利乃家ハ八幡教痛流あり源氏乃棟梁あり久しく平家
の下にたると進出しとを迷懐しとく不亂乃世中を幸不思
企てあふすやあま更不化ありあふす寸と高時入道へ中
ものありしハ入道実りともい上洛ありしと一日乃内了
之度より復促したるけり
足利小藤氏と源氏と両流あり其備底を尋ぬるす下
野國足利郡了武藏守秀郷朝長乃後亂すく鎮守府將軍

兼阿波守兼光に代乃孫散位成約と云々のあり足利佐
野兩郡數ふ町乃領主とく足利乃館不住け世ハ世ハ
ハ足利乃大夫と稱しけ里成約乃長子足利右郎成綱
其男足利孫右郎家綱乃ち五位了叙しけ世ハ同く足
利の大夫と稱し家綱祖父成約乃子と云ふと系圖了
記を指し成綱家綱乃嫡子有綱了女ありハ幡敷乃
下野守あり任國了り海け系圖官仕了り多くと寛治
三年八月二日男子を産み童名ハ普賢丸
外祖父有綱の許小成長け世ハ足利三
郎と稱しありハ幡敷陸奥守鎮守府將軍あり出
羽國乃武衛家衡を討平け上治ありけ系圖了り普賢

丸ちめく見奉り入りのハ屋く義國と名付くと云ふ
都へ上り也康和二年正月廿日十三歳あり常陸國乃
佐竹昌義の國中ハ亂妨きを追捕せしけ乃宣多を
帶しけ下野に下向し足利館了十餘年住しけ系
圖外祖父有綱乃弟俊綱乃息女を通ひく永久三年に
月朔日男子一人誕生あり童名ハ壽三丸のちハ足利乃
新藏人義康朝長あり後あり義康朝長ハ尊氏卿ハ代乃
祖了り海と云ふ源氏乃足利之乃傳ハ前編了記也
又俊綱ハ五位了叙し出相守了任しけ世ハ足利乃散
位と云ふありハ足利右郎と稱し俊綱乃嫡子ハ又
右郎忠綱と云治承四年宇治川乃先陣とせり勇士也

忠綱乃子孫あはれ氏乃是利あり 後編忠綱乃傳

尊氏卿高時入道う倭侯あまの志をりあふを深く憤り
先父乃表了籠く中陰乃日敷いまく過さる子笠置の寄
て不催なす後て孝養の表服を脱く後威甲冑不身を装
秋乃表を百里乃遠く揮ひて其勳勞いまく幾許も報ひ
さる不令まゝ長途の征伐了催侯を就て偏に家僕等と同
不と子思入あ教了後居まゝぬ故教讃列 貞氏 祖父或部
大輔 家時 朝臣 教北條一家を亡りて天下を承るやと和利立
まゝんあふゆ也とも時にくらされハ徒了過く後人ま今乃
時あはれ累代乃本意を遂へる折あはれあ後思立くやと
おのほ也くハ憤りをおさくく出陣乃用意をせり後たり

尊氏卿乃北方ハ赤橋相摸守盛時乃息女みく今年四歳
の養女おろ海をまゝ竹養丸とく七歳乃養女を加古六
郎女乃腹あり大方教くハ上校兵部少尉乃妹不
て尊氏卿乃母君ありまをらる子打具く上洛あま
と定めら也ゆは長時入道圖喜あ後をあやくハ
高時入道乃領了系り是利教ハ養女北方まゝ留具是く
て上洛せゆを後入とやらん戦場へ赴く人乃妻子をつり
てやあふ源氏乃嫡くなく久く平家乃下風不立を以て
法也ハ一定官軍ふかまを後入をみあそ養女北方ハ
鎌倉了止め並系くをわつハ一紙乃起徳文を残しおろを
五人やう御まゝハあま海にけしと申勸しあす高時入

八幡太郎義家旗

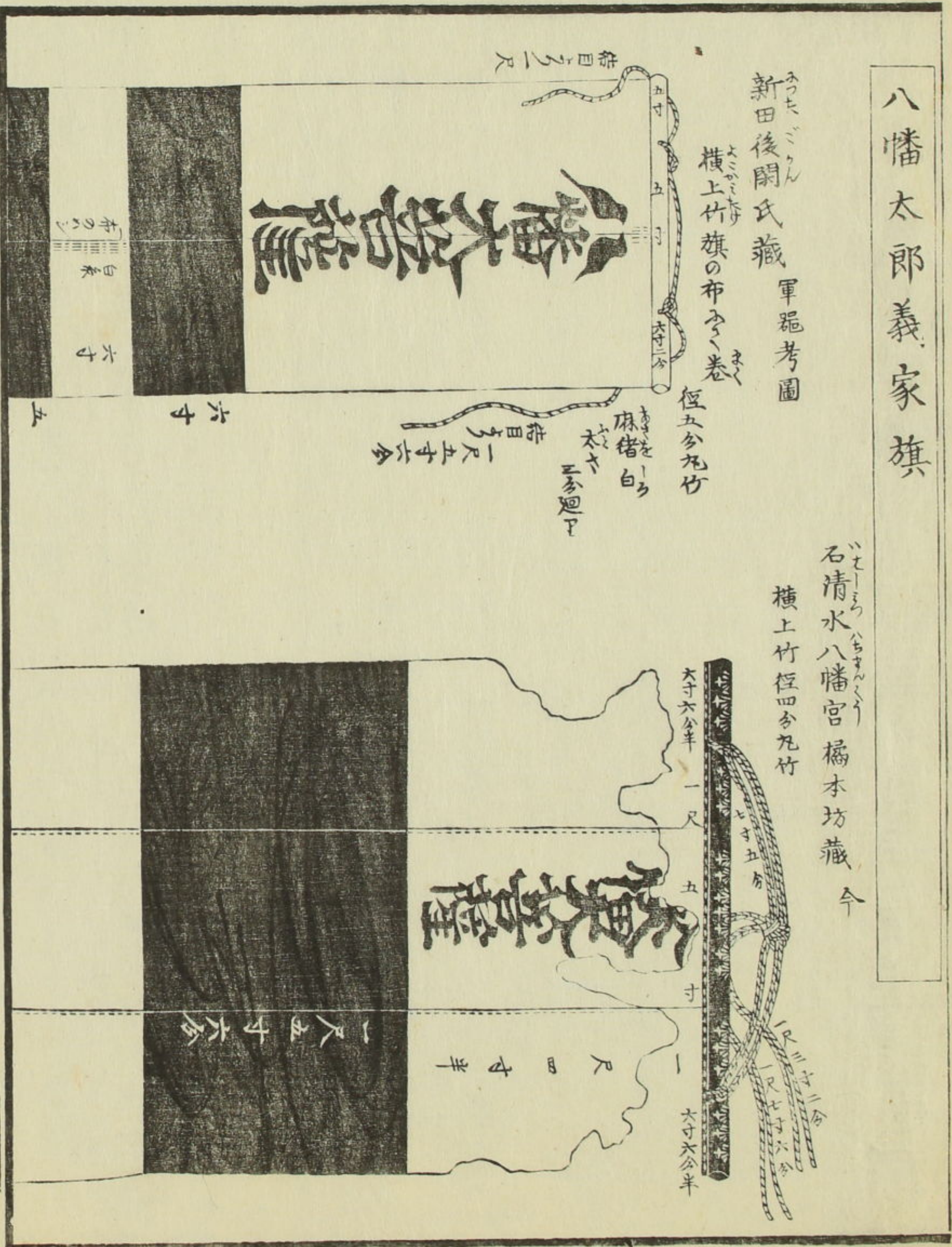
石清水八幡宮橋本坊藏 今

横上竹 徑四分九竹

徑五分九竹

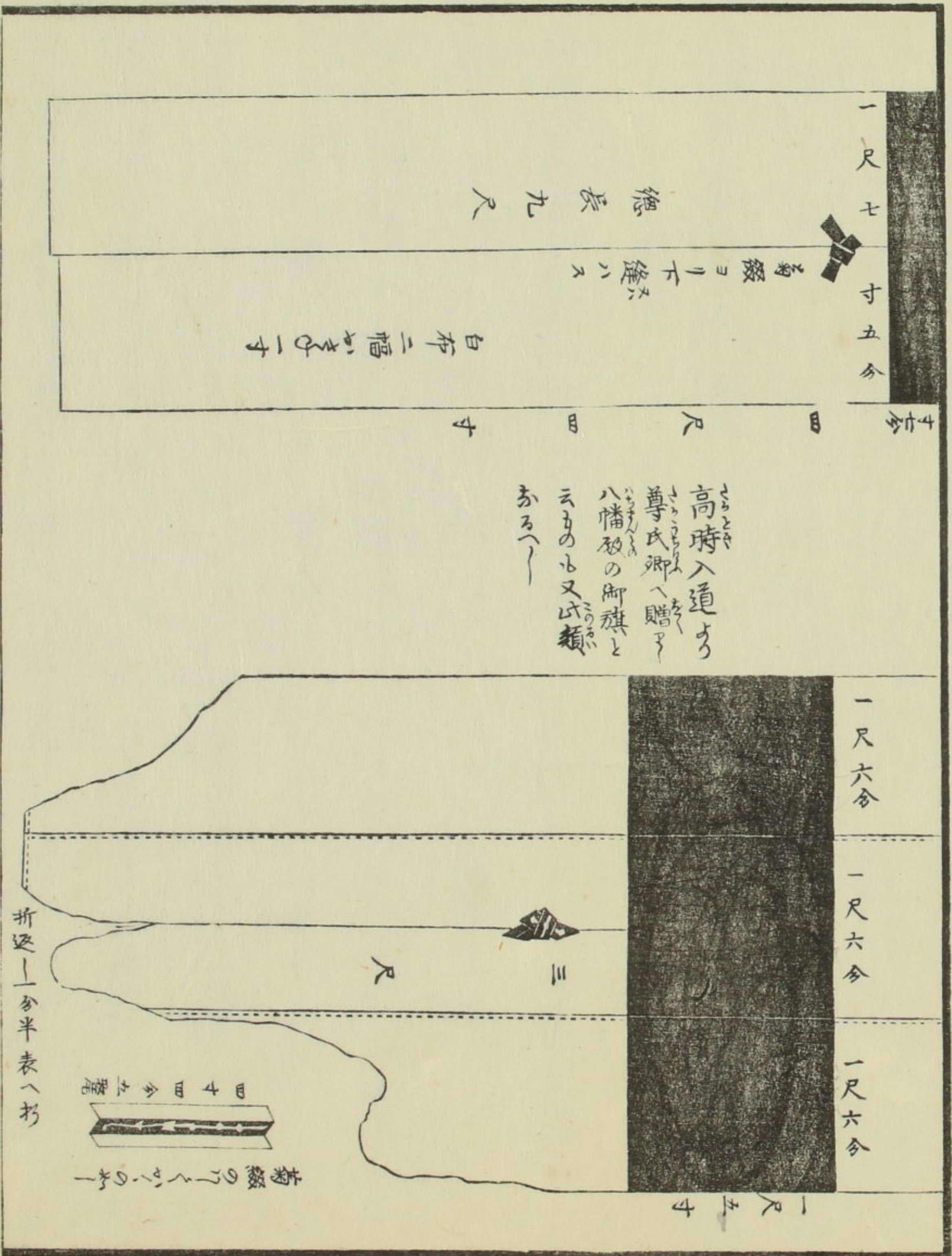
新田後關氏藏 軍器考圖

横上竹旗の布の巻



八ノ六

高時入道より
尊氏卿へ贈り
八幡殿の御旗と
云ふもの又は類
ある一



總長九尺

綯綴ヨリ下縫ハス

白布二幅ヨリ一寸

折込一分半表ハ折

綯綴ヨリハハの一
四寸四分五釐

道実を乃てわりひく直義使を遣りて彼中津上津乃侍
供上御臺若菜を具しあふとやらん承りて都ハ物さば
かしくゆへに今不と女性幼穉乃津方くのからをあふく行乃
たもあふあふも覚ゆる人謙倉ハいも世あくくくても
安らふへうゆへに子け方ふと先き覺られゆゆんてこそ
秘多へこれと未掲相列かくゆへに自秘乃時小いさく
怖畏あふへく人かつ世中駭くく扱くうきたふて中
ゆく互子危けふ相疑ふ折るゆへに紙乃津松去を物
たりく人心を安堵つるゆへにと申けぬハ尊氏郷胸
乃内り謀らゆつて乃早漏たるやらんと大不驚きゆゆ
のとも中舎才兵部去捕直義朝臣を呼ぶくはと必何有

へくと室の合をゆひけふ直義朝臣中されけるハ如斯大事
を思召立れくま役の小事不拍をせゆ人へさふ非を要盟
ハ神受まとも本文乃此起後文を遣されゆんて何乃子細り
ゆへに左傳兼公九年の傳ハ要盟ハ質ホ一神臨ゆくと有
まけりて推北方ハ赤橋相列乃許不送玉とん不別乃子細り
中一若君ハ幼多へき家乃子一人二人のうと重れゆゆ
まて師ハ安らゆゆと也定玉へりと勸めゆゆれハ尊氏乃
も此義り同くゆゆかち起後文を當時入道へと贈ら
せけふ入道大不意ゆゆ我館ハ尊氏郷を請ハ餞別乃
饗應とくゆゆ乃珍膳を以くされ其よあく白旗一流不澄刀
馬鞍を五出く引出物ふと端らゆける折ハ白旗ハ八幡殿乃

御旗みきみく右幕下頼朝卿よりより以來いらい代々たゞみ傳つたむひくを二位尼
君きみ改子かきこ頼朝卿より乃去疾いさしも春時はるときも借與かかく承久じやうきう乃合戦あはれり差
世たりよの御旗みき乃威徳いどくみくは海靜濫うみせいらん了鎮ちんまりゆき今
又君子またきんし賜たまり進まり同おなけ夜乃軍よのぐん了打勝うちかちと玉たまへりと毒どくき
中ちゆうけ道みちの尊氏たうじ卿よりも守しる社やしろの御旗みき乃多おほく入いるを深ふかく去
ひ五いひ上うへ校まが考かう原はら助憲房すけのりをもりて仁木細川にきこがわ以下宗徳しよたけの
一族いちぞく三十餘人さんじゆにん名越尾張守なごし不先ふさきり鎌倉かまくらを進しん發はつあり
足利陸奥判官あしかがむつのおん義康よしかん乃長男ながおん足利あしかがを即すなはち義清よしかよ乃孫まご仁木左
郎實國じやうじつこく細川次郎こがわじらう義季よしかせ戸賀とが修しゆ三郎さんらう義宗よしかねその子こ荒川あらかわ二
郎満じらうまん氏うぢ也なり仁木細川にきこがわ乃先さき祖そり足利あしかが上かみ総すべ介すけ
義兼よしかんの子こ乃長子ながし畠山はたけ義純よしかんは男おとこ施井せい義胤よしかん也なり畠山はたけ施
八ノ八

井乃祖いのみそり足利あしかが左馬頭さまたて義氏よしかん乃長男ながおん吉良よしか上かみ総すべ介すけ
長氏ながうぢそは子こ今川いまがわに郎國らうこく氏うぢ也なり吉良よしか今川いまがわ乃祖そり足利
宮内みやうち左輔さほ泰氏たいうぢ乃長子ながし斯波しば尾張守おし家いへ氏うぢ次男じなん荒川あらかわ次
郎義顯よしかんは男おとこ石塔いしだうは弟あに頼茂より五男ごなん一色いしき宮内みやうち卿より律りつ肝かん公こう深
六男むつなん上かみ野の律りつ肝かん義辨よしかん七男しちなん小こ俣は法はふ印いん賢けん實じつ八男はつなん加古かこ六郎むつらう
基氏もとうぢも後ご斯波しば荒川あらかわ石塔いしだう一色いしき上かみ野の小俣こは加古かこ乃祖そり
此等こゝろ乃なり氏族しよぞくハ皆みな足利家あしかが乃近親きんと云いへり外ほかハ上かみ校まがハ
母方ははの親屬おんぞく高たか左平さへい伊勢いせ等らうハ累代かさね乃家人かみんといいゆる
尊氏たうじ卿よりも近江おん國くに野洲のしゆ郡ぐん不つ着ちやうせら後ご爰こゝより海老名えびな季せき
行ゆきを使つかりて船ふね上かみり遣つはり官軍くわんぐん不ふ加かりて忠ちゆうを竭つせん
一いとヤササ勢せい玉たまへり主しゆ上かみ後醍醐ごたいこ天皇てんかう 敬感けいかん斜しやありて還幸えんきやう乃時ときハ

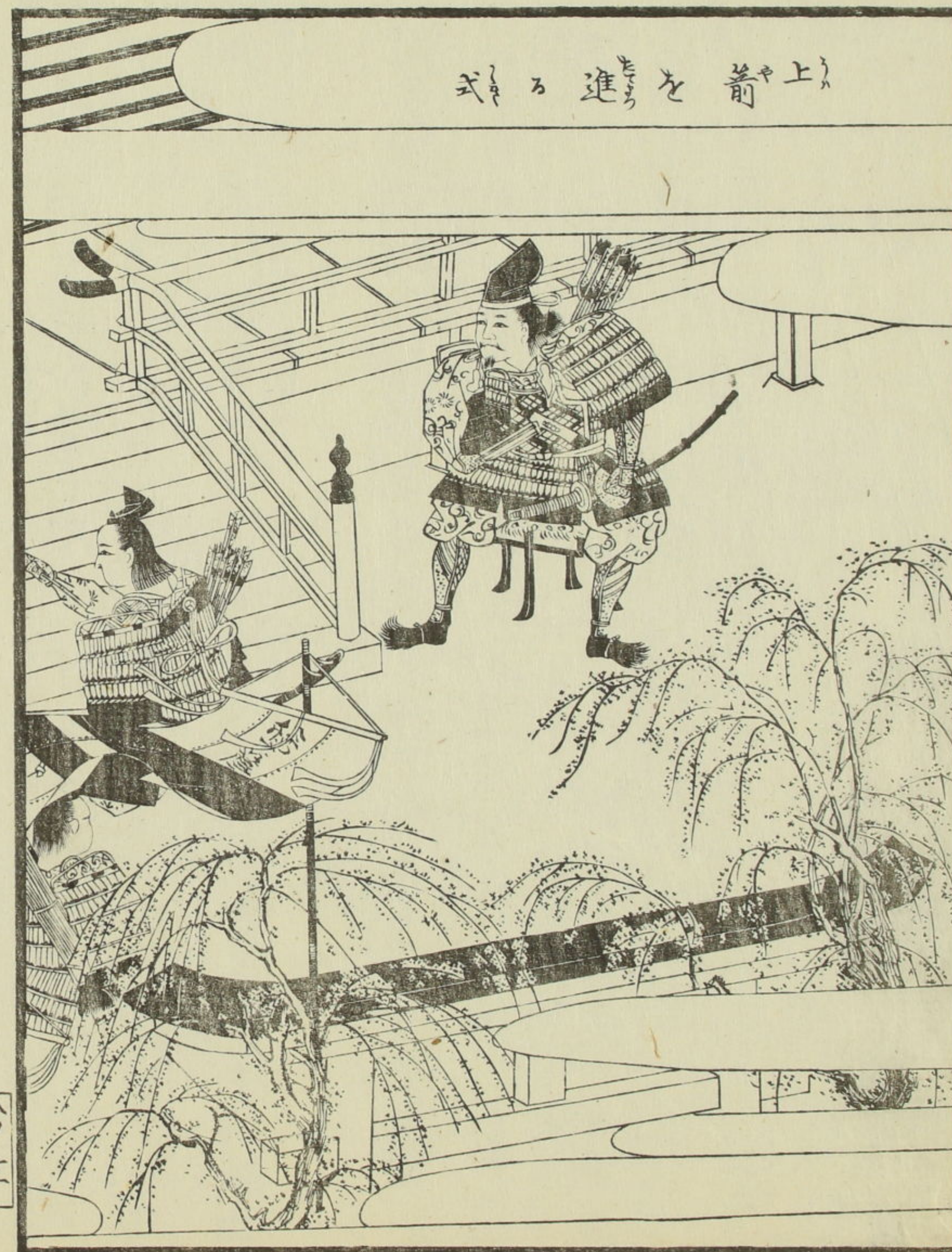
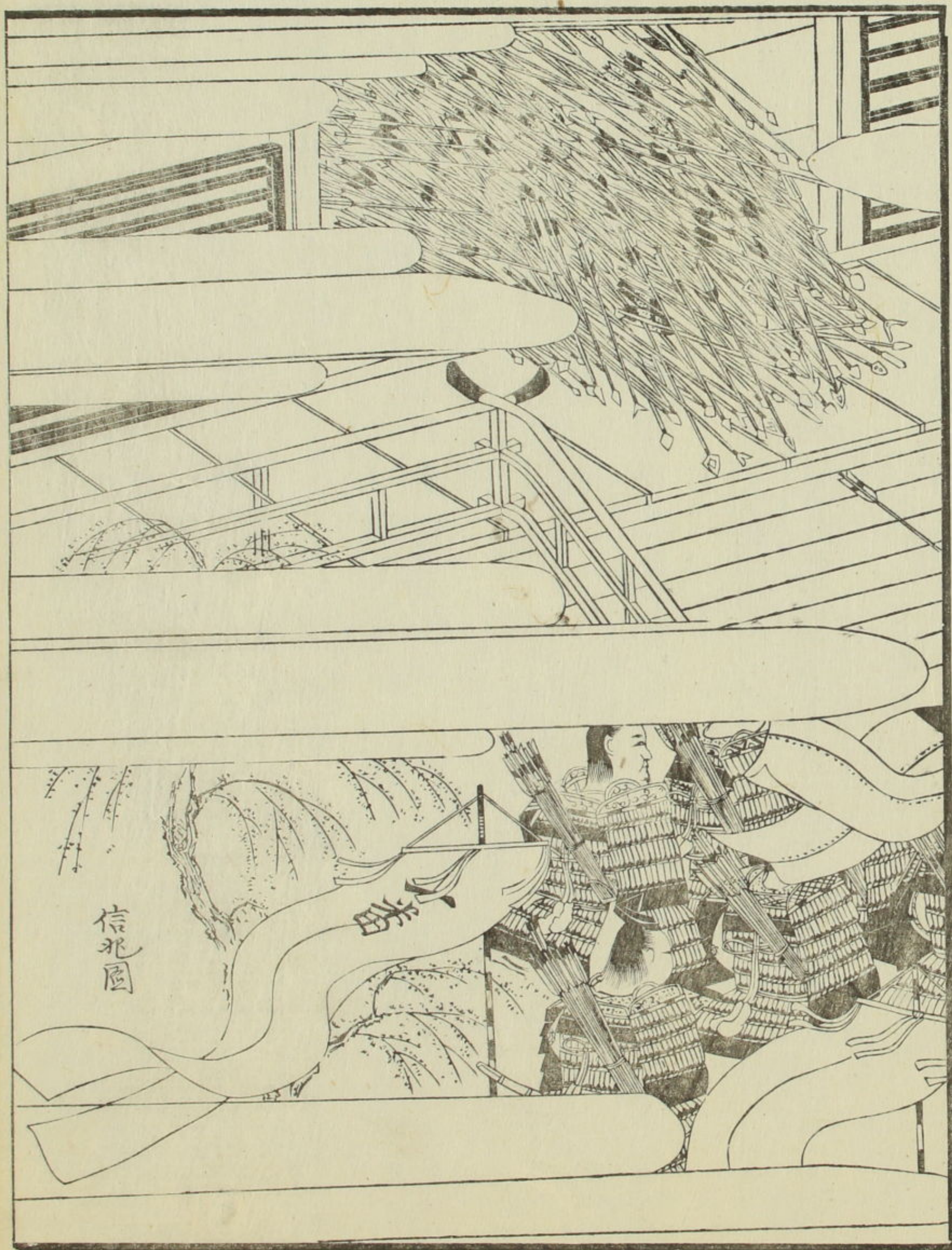
恩賞の請ふ依處一とくより高時法師乃一類を誅戮一曰海
右平を致とへる能元弘三年四月十六日宣旨を成れ使去
ふの遠路乃勞を賞とらむと備中國井原の莊を賜とらけり
備中國後月郡名越尾張守高家たかたか教と有との養子と
ふ井原村あり
去る以同十九日入浴一と軍乃ふとけをせり終ける

此時尊氏卿ふと二条高倉乃所了入所あり一也四月
日入浴在 抄氏御所を六条修理大夫顯季乃男贈元大
長實公乃亭あり一に二条大納言隆親卿子傳とり隆
親卿乃室家ハ足利左馬次義氏朝臣乃女あはは持大
納言隆顯卿と足利治部大輔賴氏とハ從兄弟なり此
等の好ふよりと尊氏卿ふ傳とり建武二年八月二日中

前代蜂起乃時とく廿八ヶ月乃間中なあり一と
時小官軍大將左中將忠顯朝臣赤松入道圓心六波羅を
攻と軍利なく男山崎了陣を多と後援乃勢を待付重
て六波羅を攻んとする中同之けと高家ハ久我殿より追手
を山崎へ押寄せハ尊氏卿ハ挂川を打渡し搦手へ向とれけ
又同廿七日高家赤松と戦と討死し追手乃軍破れつと
とち搦手了り知ぬ顔ふと大原野乃芝居酒盛一と傍か
寺院の名を問ハ勝持寺と合入軍小勝と持とハ名詮自性因
出度一とと大原一所永代寄附せり也
尊氏卿西兵小勝と軍郭子かろ人を見とむると勝持寺の
院主山林乃竹を切と旗竿と一所札と寺号を去と出とけは
大木松茂有と願ふを 辱とく打立り入と山崎を後ふあり大
勢らと一とをいんとそ

江乃坂を打越丹波國桑田郡篠村に至り八幡宮乃社頭の
柳の樹に旗をくし三船より成進たる論旨をありあり拜見
かゝる色より直子六波羅を攻落さへしとて馬乃頭を還さ
せける海老名家系不い氏々季行の船より還るを
と云れ丹波國の任人久下弥二郎時重そ乃祖重光鎌倉右
大将頼朝卿と此乃叔父と義兵を揚らせけり時一番
系又ける不依く頼朝乃自多不き一番と書く賜又けれハや
く旗乃致不あたふを去先不きと馳かたる是を娘と
志く我少くと系又けせけ二万余人及ひたり合戦
の祈禱として上箭一筋八幡宮へまらせし直義朝長續く
おかりきりる徳軍勢ありせと我後れと持たりし後子

頼朝の禱くみはぬく不そ成りけり大江乃坂を過る比
白鳩一羽旗乃上子形翔り神祇官乃森ふ止りけしハ八幡
宮乃沙計らひあふくくと即ち不陣をとる六波羅ありと
名越尾張守ハ討死し是利尊氏ハ敵ありぬ如何せん肝
魂も身も流しと落し先乃塞くぬ心乃鎌倉へ下り高時入
道と一川子成りまゝあそ京都を攻らるくと六月七日の
曉今上後醍醐天皇の東宮なり上皇後伏見院伏見院
乃御國母女院後伏見院乃女御今上乃御乃御輿を先不立
ありとて六波羅乃南北乃亭をまゝ奉り頭人ふんとの
けしハ六波羅乃南北乃亭をまゝ奉り頭人ふんとの
家く不火をうけ一字も残さく焼くらひせと後不馬を船



上へ奉^た里六波羅^{ろくは}落^{らく}城^{じやう}乃^の由^{よし}を^を任^{にん}じ^しけ^しは^は五^ご月^{げつ}五^ご日^{にち}鎮^{ちん}守^{しゆ}
府^ふ將^{じやう}軍^{ぐん}小^{せう}任^{にん}せ^しら^るも^も内^{うち}乃^の昇^{しやう}教^{きやう}と^と免^{めん}せ^した^り六^{ろく}月^{げつ}七^{しち}日^{にち}還^{くわん}幸^{さう}
乃^の後^{のち}尊^{そん}氏^し卿^{きやう}源^{げん}氏^し乃^の名^なを^を記^きた^りて^て賞^{しょう}せ^られ^りも^も從^{じゆ}仁^{にん}位^い下^げ
左^さ兵^{へい}衛^{ゑい}督^{とく}小^{せう}任^{にん}せ^しら^るも^も後^{のち}醍^{たい}醐^こ天^{てん}皇^{かう}
守^{しゆ}を^を兼^{かね}御^ご諱^{ごん}乃^の字^じ後^ご醍^{たい}醐^こ天^{てん}皇^{かう}
改^かめ^らら^る

天子乃御諱乃文字を臣下小賜^{たま}ら^るり^しと^と日^{にち}本^{ほん}書^{しよ}紀^き小^{せう}
白^{ちやく}髮^{ふつ}武^ぶ廣^{かう}國^{こく}推^{すい}雅^や日^{にち}本^{ほん}根^{こん}子^し天^{てん}皇^{かう}清^{せい}寧^{ねい}諸^{しよ}國^{こく}小^{せう}白^{ちやく}髮^{ふつ}部^ぶ余^よ
人^{にん}白^{ちやく}髮^{ふつ}部^ぶ膳^{ぜん}夫^ふ白^{ちやく}髮^{ふつ}部^ぶ鞠^{きく}負^ふを^を置^おき^し莫^なハ^ハ遺^い跡^{せき}を^を垂^たれ^り後^{のち}
小^{せう}觀^{くわん}し^しむ^むと^とあ^あら^らせ^せ始^{はじめ}あ^あら^らへ^へき^き終^{はつ}せ^せハ^ハ天^{てん}子^し乃^の御^ご名^なを^を諱^{ごん}
と^と云^いふ^ふ上^{じやう}古^こハ^ハ無^なし^しと^と知^しる^る元^{げん}明^{めい}天^{てん}皇^{かう}乃^の御^ご名^なを^を諱^{ごん}帶^{たい}日^{にち}
八ノ十一

子^{この}姓^{せい}成^{せい}務^む天^{てん}皇^{かう}乃^の御^ご諱^{ごん}小^{せう}觸^{じゆく}と^と改^から^らせ^しし^し由^{よし}續^{じき}日^{にち}本^{ほん}紀^き小^{せう}
見^み於^お又^{また}孝^{かう}謙^{けん}天^{てん}皇^{かう}乃^の御^ご名^なを^を諱^{ごん}し^し内^{うち}大臣^{だいじん}右^{みぎ}大臣^{だいじん}乃^の名^なを^を稱^{しやう}
ま^まを^を得^える^ると^と云^いふ^ふ勅^{ちやく}書^{しよ}を^を下^{くだ}され^り桓^{くわん}武^ぶ天^{てん}皇^{かう}延^{えん}暦^{りやく}口^{くち}年^{ねん}
乃^の詔^{しよく}ふ^ふ乃^の臣^{しん}子^し之^の禮^{らい}必^{かなら}君^{きみ}諱^{ごん}を^を避^さへ^り順^{じゆん}者^{しや}先^{せん}帝^{てい}御^ご名^な及^{およ}
朕^{わが}之^の諱^{ごん}公^{こう}私^し觸^{じゆく}犯^{はん}小^{せう}思^しひ^ひ以^も自^{みづか}今^け以後^{いご}改^か避^ひを^をし^しと^と
白^{ちやく}髮^{ふつ}部^ぶ御^ご名^な乃^の姓^{せい}を^を真^ま髮^{ふつ}部^ぶ山^{さん}部^ぶ御^ご名^なの^の姓^{せい}を^を山^{さん}と^と改^から^ら
也^{なり}仁^{にん}明^{めい}天^{てん}皇^{かう}乃^の天^{てん}長^{ちやう}十^{じゆ}年^{ねん}小^{せう}天^{てん}下^か人^{にん}民^{みん}姓^{せい}名^な郡^{ぐん}郷^{きやう}山^{さん}川^{せん}等^{とう}
雖^{なほ}諱^{ごん}小^{せう}觸^{じゆく}者^{しや}あ^あら^らし^し改^かめ^らる^る後^{のち}菅^{すげ}家^け乃^の御^ご名^な道^{だう}真^{しん}
文^{ぶん}德^{とく}天^{てん}皇^{かう}乃^の御^ご名^な道^{だう}兼^{かね}を^を犯^おし^し清^{せい}和^わ天^{てん}皇^{かう}乃^の御^ご名^な惟^い仁^{にん}と^と
ろ^ろ小^{せう}從^{じゆ}立^{りつ}位^い下^げ粟^{あわ}田^{でん}朝^{ちやう}長^{ちやう}惟^い雄^{ゆう}を^をよ^よし^し惟^い道^{だう}宿^{しゆく}祿^{りやく}承^{じやう}更^{えい}あ^あ
五^ごハ^ハい^いふ^ふ也^{なり}共^{とも}貞^{てい}觀^{くわん}七^{しち}年^{ねん}條^{じやう}教^{きやう}大^{だい}長^{ちやう}良^{りやう}房^{ぼう}乃^の兄^{けい}弟^{てい}七^{しち}
の^の実^{じつ}承^{じやう}了^{りやう}ミ^ミ也^{なり}

人良輔良相仁明天皇乃御名正良を犯せし事
院大臣時平と光孝天皇仁壽致みく元服せし衣翰を
深らむ御名時康乃一字を賜へる如き事有りん
於尋へ

建武元年正月五日正之位叙し武藏常陸下総乃守護
職を賜ふ折鎌倉六波羅を亡きはやと叡慮を廻されより以
來楠赤松名承新回以下官軍不属し忠功を致し將士
多し申ふ尊氏卿を勲功第一と定めらせけり尊氏卿乃
母方乃叔母より加賀局御加賀局と云はし頃より女乃
西園寺家御妻局と云はし始ハ勸修寺別當宮津入道道鬼
ありと平記りし也乃御方より後乃准后新待賢門院と云

けを以て金銀珠玉綾羅錦繡ハ云ふ及も准后乃好まき
玉入物の朝暮心を盡し奔走せりけり准后の能
執申せ玉ひける故と云ふ年九月十四日参議不任せり終る
左兵衛督武藏守を元乃如しと形り同二年高時入道の
二男龜壽信濃國諏訪賴重を語らひ謀叛し鎌倉を襲
て成良親王を追出し其勢をゆるく関東不振んとし是
を征伐せらばんと尊氏卿あはれハ叶はずと朝議既不一決
せし處尊氏卿中されけり坂東へ馳下り合戦乃忠を致し
侯とんと救誼乃正の子細を申ふ及も此ハと申士卒の勇氣
を勸免しとい大将乃威勢之恩賞と不依と云ふ尊氏朝
恩をこかく身既ふ御相了列しといと云と戰場不向て軍

兵を指揮任すひんため八座（八人あり）乃頭要を解く征夷大將軍小補せらるる關東八ヶ國乃管領を賜はるる勲功の賞を速に下沙汰しひん也と奏聞ありし八ヶ國乃管領の請に依へり也と由征夷大將軍ハ今交合戦乃功の徳入へり御免かくた征東將軍ハ任せり也

高時入道乃長男相摸太郎邦時ハ幼名ハ万壽丸母ハ五大院宗繁妹元弘三年六月廿九日十六歳あり謀せらるるその弟龜房（あまひハ秘壽丸と由あり）高時入道滅ひり時十歳ありにありけを謙方盛言ひそり信濃國へ具し下里謙方頼重（謙訪祖）家小匿したりし上洛し西園寺家小隱也居けり叔父乃刑部少輔時興と議し

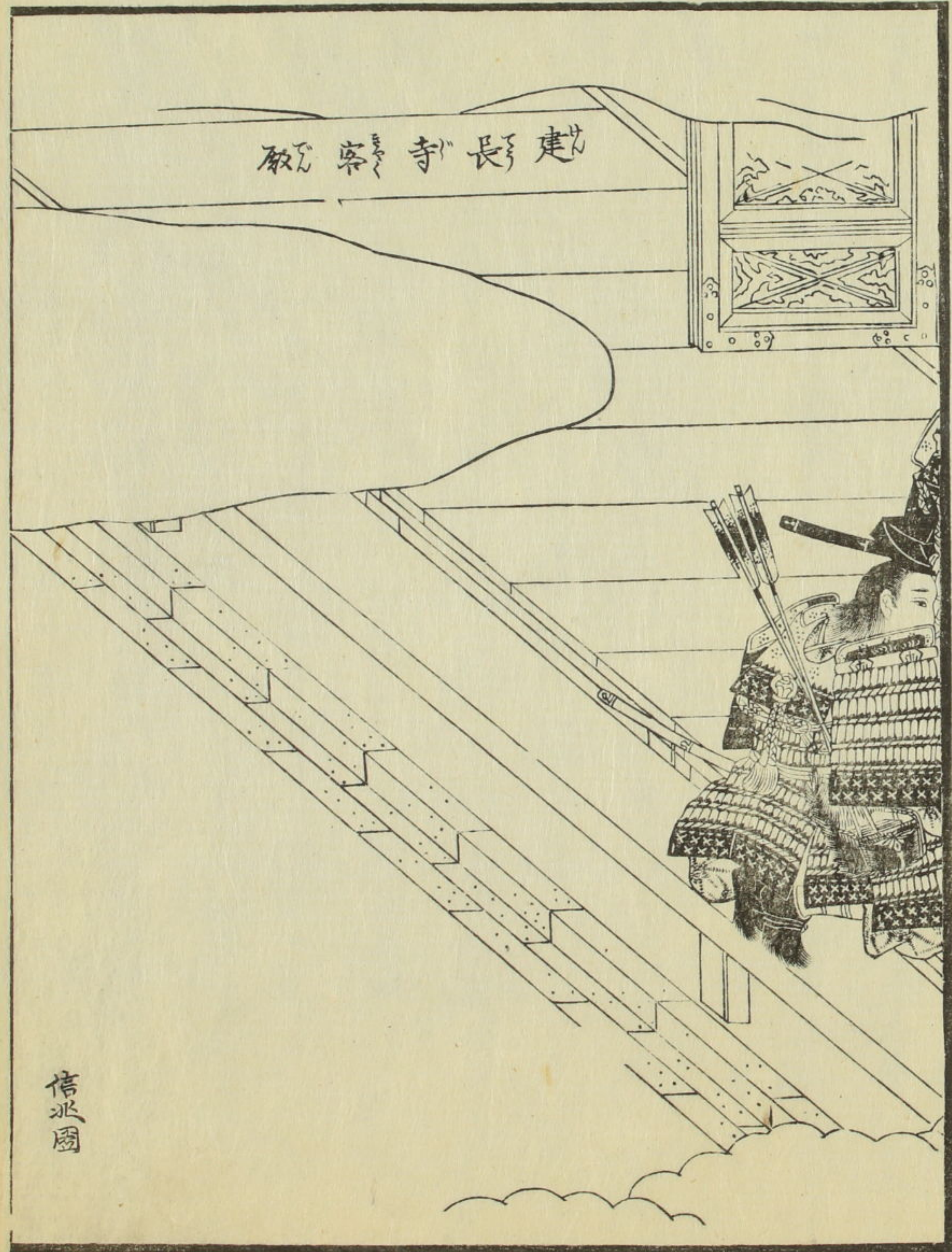
元服し相摸次郎時行と稱し信濃國ふて旗を揚げし謙方ハ河守三浦介入道清久ハ山城守塩谷民部大輔工藤幸向葦名等馳加らるる五万余騎不及ハ（時相摸次郎）歳人心を激しぬけり至らば但後醍醐天皇ふたり百餘執事相續したる武家乃所職をとりさ公家ハ統の政とささせしかり今す大々名と崇敬せらるる也一ハ時行ハ兵士とありし也思ひ居たりし相摸次郎ハ既録倉り押寄る也武藏國ハ出合戦しける官軍忽ち打負く小ハ秀頼府中あり自害し失ぬ鎌倉ハ是利直義おふり勢あるふり叶ありし七月廿三日箱根路をさし落給へは同廿八日時行雲霞の勢あり入替けり是利直義民部

討て乃大将軍とて下向乃申を聞給ひて乃向て駈
散せよとて必越時基を差向ける小時基橋本乃軍入り
討つた中へ入るるもさうさうさの彼處にたまりぬを箱根相摸
川度々乃軍破せり八月十九日時行鎌倉を落し乃
是次延元二年の冬小吉野教へ去り亡父高時入道乃
過を御免候り官軍みかへり尊氏を追討仕るべくいと
奏聞せし小忽小多年の勅命を免され北畠顯家卿と共
小鎌倉を攻入是利義詮を追落し美濃国青野原に
高大秋吉今川五郎入道を打破り首を多くと三百餘
級泉列阿倍合戦をこふる利を失ふと云と小戦乃罪
小ありはとて吉野教小ありけしは左馬権頭小を破せ

ける按小時行初年三平綱経ありと云謀り後久ハとの
年僅五六歳か里處に乃戦功大り懸ふへ一十四
歳乃謀り後ハ父祖に小十に歳ふり同三年義良親
左馬権頭を任じ據あるり仙た星
王の奥列へ發向かさせらる時小宗良親王と共遠江
下向し官軍を催促し今川範氏と疋馬野入戦し是
克と云と小義良親王乃御舟に遇り伊勢國へ歸るを修
けしハ時行小宗良親王と共井伊谷小持と共井伊高顯
を憑りて暫時の有けるり文永二年八月廿日伊賀國
卒を乃年三十歳といや一書り時行乃長子を小次郎
行氏と云行氏乃小三郎時
尊氏卿所望乃征夷將軍ハ勅許ありけしと小關東ハ今國
乃管領を賜りて八月二日京都を進發ありけしハ我

と國々乃武士馳加らう三河國矢野乃宿みく直義朝臣と
一手ふあり又万餘騎ふ成ふたり比由鎌倉へ閉えけは
去大軍を待付く敵の氣を乃すぬくの叶す先んず時を
人を制す致し利ありとく名越式部大輔時基ふ三万餘騎を
差添く東海道を攻とる遠江國橋本あり八月八日夕刻より
軍於里三十餘ヶ夜入替く戦ひける時基終ふ打負く佐
夜乃中山を引退く 橋本宿と云の遠江の國濱名郡野井乃西
ふあり比合戦の頃ハ濱名橋本に野井の渡
ふの向今の道入り十に里許を隔たり 將軍時基乃先鋒仁
本細川乃一族命を棄く真先を馳せハ平家 時の後陣諏訪
一黨名を惜く防ぎ戦ひけはと由遂子叶てハ箱根水谷の時
ふ支ららう 佐夜乃中山より箱根を元 ありハ海道第一乃切如か
廿八里五町半許あり

此の敵も容易く懸らうと思ひくふ赤松筑前守貞範先登ふ進
て勇猛あらうを拂ひ多しハ時基あふ由堪え引退く清久ハ
城も返し合く戦ひけるハ郎從ハ皆討せ其身ハ忽生捕る翌次の
合戦將軍ハ以由勝る衆と云と由平家乃士卒一人あり七降人
不出ふをのくまらうハ時基能士を養入術を教ふる相
模川あり秋乃時雨く河河岸を浸けは水を開て陣を
張敗軍乃士卒を待付んとせハ高越後も赤松筑前守
佐木道長長井宗部少輔等川を渡し平家乃陣の後ハ廻
平家前後の敵の度を失ハ固瀬を引退き腰越十間坂如く
十七ヶ夜乃合戦ハ或ハ討せ或ハ疾を蒙る僅ふ三百餘騎
不成りけり諏訪ハ河守今ハ是すくく先時仍を落し



後宗徳乃大名に十三人大所堂乃内了走入自害くく必を滅
亡乃後不そとめける其死骸をか面乃皮を剥く何をそれと見
分兼々此の時乃も定く比門了有らんと追捕乃沙汰及たれを
將軍鎌倉了打了給くさしも威を振ひ一時乃ハ亡ひり勅給か
是ハ何の子細有へきとく宣旨をも下されさるふ押く征夷大
將軍とそ中けるゆく指本相摸川所々乃合戦了忠ありける老ふ
君賞を了たれはるふ先なき新田一族乃所領したるか東國乃
所領を急く關所不かく給人をそ付らせける是ハ東八國
乃管領を賜くうけせいふ乃すふ振舞せけるも同月廿日勅切
の賞とく從二位不叙せらる藏人頭具光朝臣を御使あく上
洛あまへきはを仰らせけり多ふり既ふ打三んと為りひはる

直義朝臣諫く中けるの折當家累代乃陰徳急り用け多年
所望乃官途を遂給ひぬ早く政所を衣幕下頼朝卿の旧跡不
嘗造あうく文治建久乃昔不擬ひ文武兼備の政道を施され
公家一統乃弊風を除くれはへりと理を盡されけり時行既
不斧鉞乃嚴刑了服しはへとも餘黨猶も謀罰了後ら以今誓
東國了罷去く静謐乃沙汰を致しはへき由勅答あうく具光
朝臣をの還されけり都の尊氏卿東國不住く上洛を以自
由乃約乃多ふり中を以同志ける処へ所領を奪くわさる
新田の氏族様々諱を搦るかハ既不追討乃宣旨を被下
へき由僉議有しふ北畠入道一位親房罪乃疑しきを以く
功乃實を捨らせんと仁政了あう以と諫中させけり是ハ

鎌倉へ專使を差向子細事乃幹を尋究めらるへし
法勝寺の圓觀上人を下されんと以鎌倉ありハ義貞朝臣乃
高時入道を滅させし時尊氏卿乃三男子壽王丸下世の國
より六月二日鎌倉へ還らせける軍散し後ありけしハ義貞
合戦乃日記に入さりしを付從ひけふ武士とハ實ハ子壽王丸
乃功ありつるを義貞朝臣を構へ上座を掠りしかと中老心
有けふを將軍儀とし移ハ細川和氏を以て義貞朝臣乃鎌倉
を滅したふハ子壽王丸乃援ハ依ふを蔽て自身乃勲勞とし
抽賞拔擢ふふ上を偽る賊長あり速に追討乃宣旨を以て
へしはを一紙乃奏状に載らせたりは状いすハ内覽ハ下させ
ざる義貞朝臣尊氏卿乃十罪を數えし同く奏状を上

ら改ける其中ハ議良親王を弑しする由を載たりけしハ今ハ
天誅連るハ處ありと逆鱗の折ふハ西國より是利敵乃被滅する
軍勢催促乃御教書し數通たりありしハ十一月廿六日尊氏
直義以下の官爵を止めらせ追討乃宣旨を成せ尊良親王
を上將軍と義貞朝臣以下乃官軍發向有けしハ圓觀上人乃
使節ハ停めらせけり鎌倉にてハ使節を以て直義ハ軍を起し
是を防んしを謀りし將軍ハ譏者乃誑惑ハ依り一旦勅勅を
蒙ると云ふ事其ハ大功いし思長忘れし其ハ今逆鱗
乃條其ハ犯し罪ハありハ後ハ退り過を謝し失を糾し
中へし形りしハ防戦の事ハゆるさし以直義案子相違し生
を立せけるハ將軍ハ編子御所を出て建長寺へ入らせたまひ

警を切く既ら出家乃如小坂勢給さんとせし如く直義給旨
を持巻し是ハ昨日手越乃軍討死したる官軍の虜乃守
みへく候ひ其父小尊氏直義出家遁世の身たると云共天
誅を緩まぬと寸と載らとゆへに逃れ道にぬ勅勅乃侍あり
御出家乃儀を思召返さしと一族乃沈倫を侍助へ来しと
申さし一ハ將軍儀逆鱗甚しかりけり然ら小尊氏も亮と共
小弓矢を握く義貞朝臣と運を天に任る死を争ふ趣し
と宣ひく胴服を脱ぎ錦乃直垂をそぎとける去ハその頃
鎌倉中の軍勢共乃一東切く警を短しけりハ將軍の警
を給らかさんう巻也乃り供ま官軍不や降らん本國不や落
ゆんとしける軍勢も俄ら氣を直し馳来りけり一日も過

とふ小將軍乃味方ハ二十万騎了成りけり十二月十一日ハの
勢を二手不日箱根路へ直義朝臣竹下へ將軍自向とれ
けるり同十二日直義朝臣箱根乃軍不利を去り官軍頗勝不
衆と云と小將軍竹下乃合戦不勝五ハハ官軍急
打負箱根を引退く將軍乃勢ハ八十萬騎伊豆乃國府不
居餘り將軍爰不鎌倉不子壽王丸を留め坂東の民不
を収め兵糧運送を安くおされしと將軍了長身入と云
強く後八十萬騎乃勢を率し正月七日近江國生來社不
法師成願坊々下餘騎不楯籠くる城を一日つたせめ
落し八日了八幡乃山下陣をとる
勢多ハ向く不勢多ハ各和勢多ハ各和勢多ハ各和勢多ハ各和
敵不あり以て致し江州栗本郡小田原より山城國後志喜郡田原路をハ

備ふ乃らるる其里に橋を固明也の九日乃早旦より軍
り義貞朝臣の向ておこるなり
始り大波乃橋をく支ける戦いなり半あかき赤松能資細
川定禅山崎小向く官軍乃後を絶んとあかき義貞朝臣
都をささく返さ山崎大波乃官軍利を失ひぬと聞けり程
小主上後醍醐天皇三種乃神器を御身不添らさ山門へ臨幸かふ
定禅都へ攻上り行とる思ひらん内裏不火を放く前殿中
殿後殿八省三十六殿十二門一時乃灰燼と成らる同日
將軍入洛志終ひ法也と云二条高倉乃所所兵火乃ため不
燒失さかへ持明院殿の東北かか中園乃公賢云の家を
以く所所とかされたり今の清藏其後定禅を園城寺へ遣
ひし東坂奉乃向城り取たりし山門へ奥列勢五万余

騎荒手小加とると直子園城寺へ寄んとす中を聞て定禅
今少勢を増とやと請ふより誰をり加勢不遣とへくと見回
終入終り官軍園城寺を責落しと見え黒畑天不傳と數
將軍二条河原へ打かむハ義貞朝臣定禅を追く東山を
後ろ元魚鱗乃陣を張たけり將軍宜ひらるハ義貞朝臣ハ平
場乃軍を好かふと云と後不元と陣を立たふハ小勢か可と
覺ゆるそ師泰向入と馳散せよと下知しむハ我少くと馳向ひ
將軍塚小打寄く入替く戦ひらる如何不して給也たる元
將軍乃前後左右ハ中黒乃旗差揚く一手一手とく彼をこら
寄合く攻戦ハ勢乃多少々見分らる所方乃悉く敵と成る
後矢射よと疑く將軍丹波路へ向く落玉ハ高上枝乃人

人々公勝さし引退く官軍ハ少く勝みのりく進退けしハ
將軍今ハ遁る如くと思われけふや梅津桂川乃邊ハ
鎧乃草摺たき上腰刀をぬんと志多ハ二ヶ所不及へり
去とも將軍の運や強うらん日暮やけしハ官軍桂川
引うへを將軍松尾葉室乃間ハいへるハ定禪拔付く
て官軍を追退くけしハ京へ引退さふ同廿七日官
軍より寄来りハ將軍北畠家郷乃陣ハ向く戦を挑
ませけるり又赤負く寺戸乃邊を落しけりハ官軍ハ坂
本へ引退しつと聞えけしハ將軍より京へ入替りて孫ハ
朝律備とより戰場乃死骸を尋ぬるを見く官軍宗徒乃大
將打死せしと思ふ如く入くハ門乃勢とも乃落しを見

く代を討留めんと鞍馬小原瀨田宇治嵯峨仁和寺の方と
子騎二子孫さし分く勢を置ぬ方も云えけり依て京中ハ
無勢乃より用人も緩りけふ廿九日乃卯刻に官軍二衆
河原へ打ち出處く火をけし時乃勢を揚けしハ將軍重
て京を落しハ丹波の曾地船井那今乃内氣道勝々館ハ入
りハ二月二日曾地をさし梅津水へ向くハ云々乃草山
熊野別當子乃薬師丸を京へ返し日野資宗卿ハ龍持
明院故乃院室を中出く軍を君と君との争ひせん謀ら
せりハ是ハ將軍朝敵たかり故子赤負ると思われつせり
持明院殿ハ後伏見院第一皇子量仁親王を云初後醍
醐天皇乃東宮ハ云々ハ御父子乃義なり後



醍醐天皇隱岐へ遷幸乃後踐祚ありは是とも御父帝より
御譲ありふ何と皇統をハ相承りりふや唐玄宗の祿
ひり追きく蜀ふ幸せらる時ふ皇太子靈武あり天子乃
位了即せらるる賊を伐く玄宗を都へ返入事らん
為ちをさく猶傾中人も有や東宮ハ子あり子位不即
て父を逐ふ法やある高時入道固辭ふく名實不暗く
ありとも當時乃公卿大臣爰ふ付さ教ふいふも後伏
見花園兩上皇重祚乃儀を用ひらる花園ハ後醍醐乃
父帝ふ當らきたまふ父とく子を黜る固より難かき也
後醍醐隱岐より還幸ありは是とも重祚乃儀ありぬ初
より讓位乃慮あけはる尊氏將軍もく名實不暗

く在を朝敵乃名を悪くを知らると云とも量仁親王乃後醍
醐天皇と御位を争ふ入危き理ありをり昔衛靈公太
子蒯聵を悪く是を逐ふ靈公薨以國人蒯聵の子辄を立君と
かを時ふ父蒯聵入る君たりんとは子辄を拒入る孔子天
倫を正しく是を為る時尊氏將軍も亦高時入
道と同く不孝の子を助け人心を欺き自命を求めん
と以是もさく讓く正しや以と云へ

敗軍乃士卒方くより馳集る程かく廿万騎ふ成ふたりはるふ
官軍の大將北畠顯家卿新田義貞朝長楠正成朝長と豊島河
原入戦ひける官軍いつも勝ふのうけ兵衛將軍大友厚東を
粟門来く九列をふく漂泊し終入筑前國多々良濱ふ

を給ひける頃ハ僅ハ百人ハも足さうけり菊池掃部助武敏也
を閉そ乃勢の微くたる内ニ打散さうけり有へり寸と少貳入
道妙惠了腹さうせ其競ふ將軍の陣死く生以番推宮へ推
寄く多々良濱乃を干瀉より駈向い息を以継さく戦ひける
り搦手より廻りける松浦神田乃志とも一軍もせく將軍方へ
降参りと菊池是れ不利を先ひ肥後國へ引返しけり九列
皆將軍方ハを氣取けるさうけり上洛を急けり四月廿六日
大宰府を去り五月朔日安藝國嚴島ハ船を寄らせ三日
氣勢あつた入り結願の日三寶院乃賢俊僧正持明院教
より氣取た分院宣を帯り氣向あり將軍志を執見
あうく向後乃合戦ハ放く勝ると云と有へり寸と少貳

多ひける 本平記云 四月六日了法賢ハ持明院殿あり前御あり
院宣也 ありは後伏見院とす 中けり乃前御ハ前ハ里
日乃院宣と見え 老嚴院の院宣也 同日嚴島を
進發ありけり周防長門備後備中出雲石見伯耆乃勢馳
冬皇兵船七十ハ百餘艘を漕あう海上をそ上らせける爰ハ
將軍屋形乃内ニ暫時同眠給ひける夢ハ觀音廿八部元舟の舳
ハ三擁護なる舟を見給ひり醒く見給へりハ鳩一ハ舳の
屋形乃上り止り居ける不思議也因廿八日湊川經島生
田森の合戦官軍屢利を失ひ楠一旗打死し義貞朝臣終
ハ敗軍を纏ふく上洛さうけり主上さうけり山門へ臨幸ある因廿
九日將軍東寺へ陣を移させけり光嚴院 後伏見院
親王 嵯峨 廿五歳初ハ 豐仁親王 後伏見第四皇子 後 量仁
後醍醐天皇の東宮也

崩御の後いさく五旬を以て帝位を簞人々仙躰を軍陣より後々
ざるに孝子乃情を非まかつ養父と抗禦せらるるに至る
何を必く四海に教誨法勝寺乃塔の前より日野中絶云資
を輔を給ふ座りんや
名之条中將實継よりを召具く將軍乃おりより東寺へ潜
幸ありぬ將軍斜あり悦ひあへく東寺の本堂を以て皇
居とあさきさなり
太平記：持明院法皇。本院：新院春宮とあり。法
皇：後伏見院あり。既：崩御の後。本院：花
園院。新院：光嚴院。東寺：法勝寺を云。
六月二日將軍乃軍兵東坂西坂本無動
寺より山門へ向ひけり高豊前守師重子を負く生捕せ
けりハ寄手百八十万騎總敗軍とて逃りけり官軍師重を
誅せしを功とて京を襲んとせさるけり不敗軍の士卒
機を取並し又大勢ふあり不々同廿日官軍京へ寄たりし
將軍乃又十萬騎不駈かやまさり西坂本へ引返り七

月二条大納言師基卿北國より敷地工本山岸瓜生以下三子
余孫を引率し東坂本へ着たりけりハ官軍是ふ力を得
て又東寺へ馳向ひ一戦不攻落とへしと謀らばけり方便と
いふ形分野人乃老々告りけん將軍は孫を漏問ひ以て
其備をふし名ハ官軍利を失ひしと引返る孫も畿内近國の
兵とも官軍不台體しハ幡山清川尾宇治田原丹波長坂柘
尾鞍馬勢多四方七道をさへ塞きとらふ不唐横越たりを明
たせば將軍乃百八十万勢たちち兵糧運送乃道絶く接し
る奉國へ逃返る不と不京勢以乃不つり多たりと山門へ向え
けりより七月十二日官軍東寺へ寄あり手を挫く戦ひて
ハ乾中義貞朝臣乃射ける矢將軍乃危し孫入帷幕の中

を朝堂の良乃柱了たち名和長年ハ大宮入く討死ハ共事
手終了打負けハ口方七道路開けく京勢ハ勢を出くる鳥乃
思をお官軍ハ轍乃魚の水涸れぬ愛不於く將軍籌く一紙
乃起復文を浄土寺の忠圓僧正乃祥へ贈り還幸乃之を勸め
ちりく不主上も亦計く還幸あふへく申を勅答あり十月九日
東宮恒良受禪乃儀仍と也一宮尊良親王と共義貞朝長
を御供ふく北國へ赴りせりハ主上ハ同日花山院へ還幸
ありぬ 迎衛の朝東洞院乃軒と拾芥抄ハ今ハ今ハ京出カ 將軍即
宗徳大を四門の發衛ふ系くせり十一月廿六日將軍推大納
云小任く孫人 十一月廿六日勅敷ふく參議後二位左兵衛督
然る不今直ふ大納 十二月廿一日主上花山院を所出あり
言ハあらと人あり

ハ世々也官方又強ぬ屋くと京白河乃騷動大くか以發固乃
為不系仕ありく大名畏く不將軍いと静不主上を海島かとお
遷りまらんハ承久元弘乃例ハあごとハ我ハ志のハなりハ
いふ成ちらんとい澳とハ煩らハたりく不出さ勢有ハハ凶中の
吉と云屋くと宣ハく也ハ人皆鎮ぬ因二年越前國全勝乃城落
たりとく恒良親王京都へ還御ありけ也ハ花山院乃古御
所入ハよりく敬固乃番を付おふ因三年八月十一日正
二位子叙く征夷大將軍不任さり於此年義貞朝長ハ流久
乃ためハ是母乃里不命を落し顯家卿ハ軍をくせく安倍
野乃雲と消流ハ官軍日々カ衰へ將軍龍乃雲を起さ
ぬくありく不執事高師直乃奢後驕淫すく甚く是

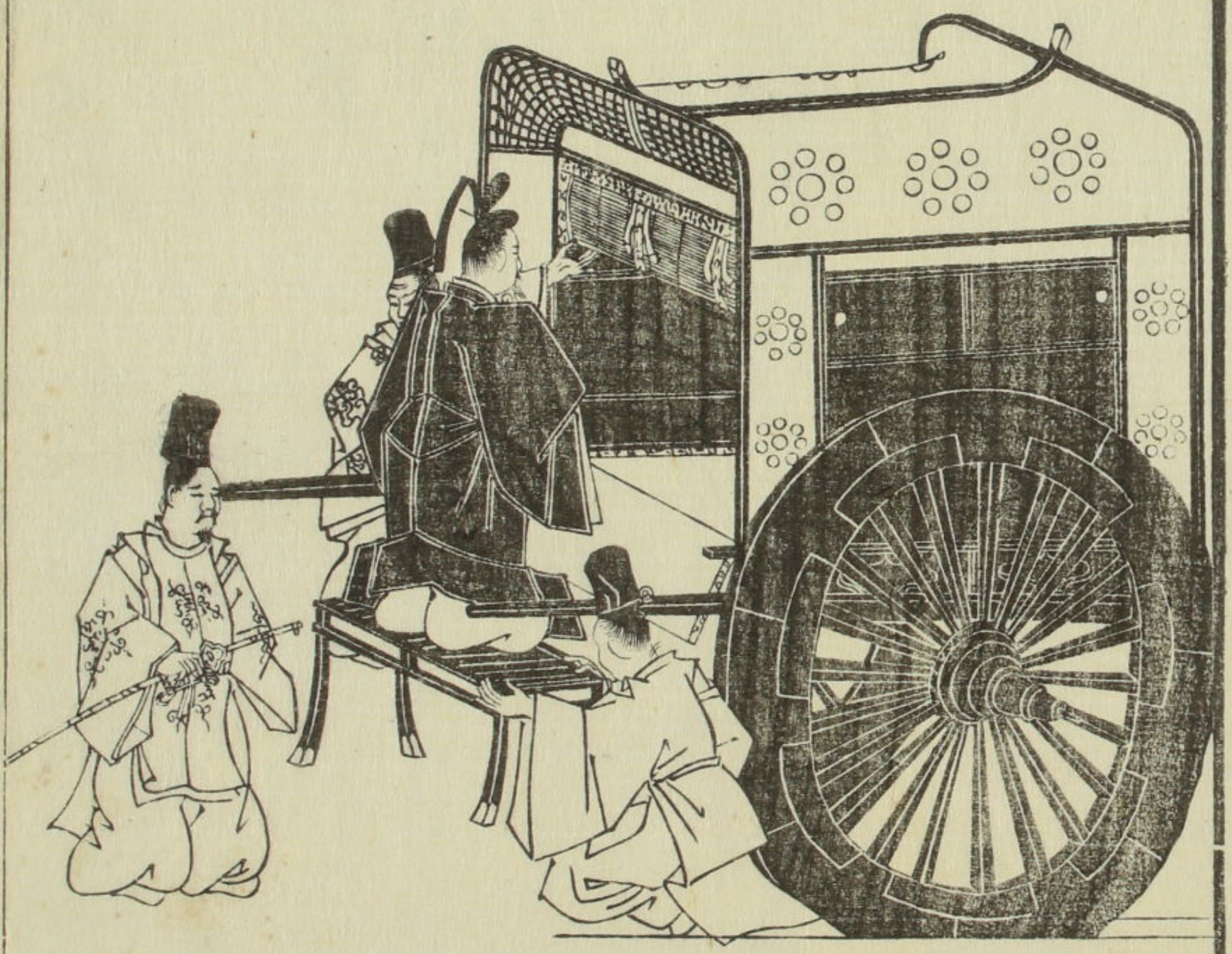
為小鹽治高貞家を失ひ身を亡せ興國十二年康永元年十二月
廿二日將軍乃母御上枝氏從三位藤原清子薨せらるる
將軍直義朝臣官を解く藤原居るる
藤原清子上枝掃部頭賴重乃息女みく弘安元年成
寅相摸國鎌倉郡内乃館あり誕生あり足利讚岐守
貞氏郷乃室家々々赤元二年尊氏郷徳治二年直義
朝臣打ひき誕生あり元弘元年貞氏郷後世給ひ
いくわとちゆく尊氏郷京都へ後世住るる
給ひけふ後三位了叙せらるる
葬めて果證院二品太夫人雪庭尼とす其後一品
太夫人を贈らるる將軍家母堂乃一品乃始あり

康永二年三月七日復任乃宣下有つと大納言を
興國五年
辭せせむる征夷大將軍の復任成を給ひて
八月十一日陰服宣下あり九箇月二日以後醍醐天皇乃
御追福乃た免入龜山乃乃宮を改め梵花を嘗て夢窓
師を以て開山とす靈龜山天龍資聖禪寺と號せらる
天龍寺佛殿上間上梁銘不虔革故嵯峨離宮昂新精舍茶
為後醍醐聖廟資培善根云云太上天皇量仁謹書とあり
太上天皇と光嚴院を云後醍醐天皇の東宮みく
越後醍醐聖廟對をらるる東宮量仁と號し
有道曾孫周玉發と云太上天皇と
銘小曆應庚辰孟夏表其推輿康永癸未仲秋成址寶殿
云々開山夢窓疎石敬白と見括

天龍寺
 供養了
 尊氏卿
 八葉乃車
 を用ひら
 太平記
 元一建久
 元年十月
 鎌倉右大臣
 頼朝卿系
 内子綱代乃
 大八葉を用
 ひらねら
 例と
 かりん



儲抄小車ハ
 八葉蓮餘を
 用入而不文例
 あり今京師
 兼野大徳寺
 現存八葉の車
 輿をうに
 みる八曜を組
 たる形
 秋色の青竹の
 あらゆる紋
 同色をこ
 濃々
 黄あろる
 紋も同く
 小濃をい



寺持院贈左府真蹟

從輪光至蓮下八寸 宝戒寺藏

為乳峯和尚書之

貞和五曆入族畜

善根無所窮

利濟徧沙界

令我益尊容

夢中有感通



真蹟

八ノ卅

